

私が数年前買ってきた鉢植えの梅が、一月になって今今年もいっせいに花開いた。

今年（令和六年）の小田原の冬は、今のところここ数年と同じ暖冬である。梅の綻びを見ると、春がすぐ間近にあると感じられる。まだ蕾がいくつも残っているから、これから当分の間楽しめそうである。妻が手まめに剪定してきたので、なかなか枝ぶりがいい。

品種は玉牡丹というしる梅である。私が買ったときは→樹高二十センチメートルくらいだったが、五、六センチほどは伸びたようだ。黒褐色の幹が斜めに伸び、その剛直さと白い花の優美さが調和してまことに気品のある花木だと感じ入ってしまう。顔を近づけると→霞郁たる香気が漂ってくる。わが国の代表的な花木として、画材にされ、詩歌に多く用いられてきたのもよく分かる。

梅を題材にした絵といえば、いうまでもなく→尾形光琳の『紅白梅図屏風』が有名である。

私は熱海のMOA美術館で、過去二回この国宝を見る機会を得た。構図が感覚的に新鮮だし、とりわけ中央のデフォルメされた水流が印象的である。これは光琳紋といって当時流行したようである。

この紅梅と白梅を配した絵について、いくつかの見方があるようだ。ある人は、それは光琳と弟の乾山だと説明する。面白いのは小林太郎の『光琳と乾山』で書かれている説である。それは作家の阿刀田高が、『紅白梅の女』という短編小説に引用している。二人の男の間を揺れ動く女を描いたこの短編は、いかにも阿刀田高らしい切れとコクがあり楽しめた。

光琳がこの絵をかいたころ、彼は京銀座の若い顧問役中村内蔵助と一人の女をめぐるて隠微な関係にあったという。内蔵助は役者を思わせるほどの美男で、光琳のお気に入りだった。光琳は自分の情婦を内蔵助に貸したり、二人でともども戯れたりしていた。実際は中村内蔵助は光琳の経済的パトロンの人だったともいわれている。

さて、光琳の描いたこの絵であるが、小林太郎によると、中央の謎めいた豊満な水の流れは、女体であってその正面がこまやかに魅惑ゆたかにあらわれているという。その気になって見ると、確かに仰むけにのけぞった頸から胸の乳、なだらかな下腹部あた

りを連想させる。

また背面はわざと巨大な尻をつき出して、後ろからそーっと忍びよる紅梅、すなわり内蔵助をはじき返しているのだという。

光琳の白梅ば→太く退しく強ばって重量感ある、大きい根をゆらりゆらりと揺りうごかして下腹をねらい、

「紅梅の内蔵助の痩せっぽちは、色男のように見えるけれども、あの日干しのみみずのようなのは話にならぬ」

と、得意がつている。

小林太市郎はこの絵をよく見ていると→光琳が事実そんな気持ちで描いた気がしてくるのだという。

実際女の肉体は股のあたりに顔をつけて上方を望むと、まさに光琳紋のような形になる。

ヘンリー・ムーアやラクロワにも、こういう造形があるのだそうっ

小林太市郎がほかにもこういうものを書いているのか浅学の私は知らないが、従来の因習にとらわれずに、自分の目でもものを見、考える人なのだろう。だから→という独創的な見方ができるのかもしれない。しかしこの説も仮説であって、真実かどうか分からない。優れた芸術作品は、それだけ奥が深いといえるのだろう。

この本を読んだ後 MOA 美術館で再度、『紅白梅図屏風』を鑑賞したとき妙にテレたような気持ちになった。同時に価値ある芸術作品の誕生は、単純な経験や動機で片づけられないものだということも納得した。

私は今、家で鉢植えの白梅を眺めているが、とても光琳のような着想は生まれない。凡才の悲しいところである。しかし自分なりに梅を見て楽しむべいい。見れば見るほど、白梅は美しく清らかで、私の心の中め汚れが吸い取られていくようだ。